●論壇

アジア諸国とくらべた日本の交通問題

ジェイムズ　L. スチュワート*

Some Contrasts in Japanese and Asian Transportation Problems

James L. STEWART*

日本の交通・運輸問題を考えるとき、われわれはとかく悲観的になりがちである。しかし、東南アジアその他の近隣諸国に目を向けてみれば、より根本的に重大な問題を抱えているのは発展途上国だということがわかる。先進諸国、発展途上諸国を通じて、自動車をもつことは、一種の地位の象徴で、最高の所有欲のひとつであろう。これを、向上してきた中産階級の夢といってもよかろう。この強い人間の欲望が、日本や欧米などの生産力と結びついたとき、今後の世界がさらに多くの自動車をもつであろうことは間違いない。どこの国も、膨張する自動車にどう対処するかの方策を見出す必要に迫られることになる。

この原稿を書くにあたって、それぞれ事情の異なったアジアの5ヵ国に住む5人の友人に、質問の手紙を出してみた。5人とも、その国では近年ますます交通事情が悪くなっている、と書いてきた。その5人のうちの車をもっている4人は、みな、車は運転したくない、電車や汽車が安心だ、距離が長ければ飛行機に乗る、といっている。そして5人とも、最大の問題、最大の危険は、その土地の人たちの運転の仕方であるという。バスの運転手しかり、オートバイの運転者しかり。

発展途上諸国では、高度に工業化した諸国ほどには、安全の諸要因を気にかけていない。経済発展が国家目標で、国民がその目標達成に向けてガムシャラに突進するものだから、その一方で、多くの個人に悲劇がおこる。

ひとつの例外は都市国家シンガポールである。この国では毎年GNPの伸び率が8%にもかかわらず、人口抑制、大規模な公共住宅建設、および公共交通の諸領域で政府が着々と手を打っている。市の中心部で自家用車の使用を厳しく制限した交通網だけをとりあげても、立派なひとつの論文になる。西欧や合衆国の都市・交通問題の専門家が、新しい発展を注視している。日本の新幹線は欧米から多くの専門家が見学に来るが、日本の道路交通システムは世界の関心や尊敬の対象にはならないようだ。

現在、とくに危険なのはパキスタンの道路事情である。いま、パキスタンの裁判所は民事・刑事の交通訴訟を14万件もかかえて、さばききれない状態という。パキスタンのある新聞記者は少し意地悪なユーモアで、「国民のなかに、心理学的処置を必要とする状態にあるものが1割もいる。不幸にして、その1割の全部が自動車の運転者であり、これが道路の危険なことの理由になっている」と述べている。

日本でも、トラック運転手の一部は慢性的に精神の平静を失った状態にあるようだ。また、私が東京の道路を走っていて気がつく弱点は、物理学的な運動の法則を無視したムチャなスピードを出すものが多いことだ。とはいえ、全体的に交通事情は悪化してはいない。たぶん、警察のすぐれた技術的指導によって、いくらか改善されているのだろう。

単に毎日の新聞を読むだけで判断すると、日本がかかえているさまざまな交通問題を解決するために、だれも、何もしていないという結論が出ることもあろう。しかし、日本では、なんとも不思議な仕方で多くの問題が是正されるのである。たとえば、車の数の増大にもかかわらず、東京の交通事情が悪化したとは思えない。交通システムを含めて日本人の生活が絶えず改善されつつあることは、大海の潮の干満に似て、その動きは目に入りにくいが、強い力を持っているのである。

*アジア財団日本代表
Japan Representative, The Asia Foundation